

宋詞雅俗言助語辭雜驗

『長田夏樹論述集（上）』第30章

（原載：『神戸外大論叢』第35巻第2号，1984年9月）

宋代に盛行した韻文の一ジャンルである「詞」の作品は、後世その内容に応じて「雅」と「俗」に分類されることが多いが、本論文はその両者を虚詞（助語辭）の使用から跡づけようとしたものである。著者は以前より「唐詩・宋詞・元曲」を別々のジャンルとしてではなく、一つの説唱文学形式の発展として捉え直すべきことを主張しており、これまで考察してきた『遊仙窟』や中唐の白話詩と『董西廂』を繋ぐ存在として、宋詞を対象とする本論文が構想されたものと思われる。

もともと民間の歌謡に源を持つ詞は、北宋の世では通俗的であることが自然とされたが、詞壇の形成とともに典雅であることも尊ばれるようになり、歐陽脩や柳永のように、一人の作者が「俗詞」と「雅詞」の双方を作る場合もあった。著者は「俗詞」において使用される「俗言」の助語辭として、

二字語：怎生、争奈（怎奈）、争奈、因甚、憑誰、恁地、只恁、渾似、那堪、莫是、管取、一任、一餉、這回、那回、箇中（箇裏）

三・四字語：○○地、○○裏、○○箇、○○生、○○向、○○是、○○許、○○箇を挙げ、一方「雅詞」に使用される「雅言」の助語辭としては、

阿誰、誰家、底事、幾許、如許、特地、恰似、端的、情知、準擬、直饒、会須、等閒、無端、故故、畢竟

を挙げて、それぞれの作者ごとに『全宋词』（中華書局，1965）における出現ページを表で示している。“阿誰”、“端的”等は一般に口語語彙とされるものであり、これらが「雅詞」に用いられているという事実は、興味深い思考材料を提供するものと言える。

中国語学の側で宋詞と言えば、南宋以降の傾向である典雅な文芸ジャンルとしての側面ばかりが強調され、日本のみならず中国でも、そもそも宋詞を中国語史の資料としてとらえる意識自体が希薄である。したがって、本論文も語学論考としては孤立したものと言わざるを得ないが、例えば著者がウィットに富んだ日本語訳とともに紹介する石孝友の詞、

我已多情、更撞著、多情底你。把一心、十分向你。尽他們劣心腸、偏有你。共你、撇了人、只為箇你。宿世冤家、百忙裏、方知你。沒前程、阿誰似你。壞却才名、到如今、都因你。是你、我也沒、星兒恨你。（『詞律』卷10〔惜奴嬌〕）

を見れば、誰しもがその豊かな口語性に目を見張ることであろう。

（竹越孝）